

G.ガーシュイン／キューバ序曲

ジョージ・ガーシュインが音楽への興味を持ったきっかけの曲はドヴォルザークの『ユモレスク』だそうです。

この20世紀前半に活躍したニューヨーク生まれの人気ソングライターは、ジャズとクラシックを融合させたオーケストラ曲の作曲を志し、独学で満足せず、当時の有名作曲家たちに教を請いました。しかしストラヴィンスキーからは、「どうすればあなたのように高い収入を得られるのか、逆にこちらが教を請いたい」、ラヴェルからは「あなたは既に一流のガーシュインです。なぜ二流のラヴェルになる必要があるのですか」と言われるほど、すでにジャンルを超えた高い評価を得た存在だったのです。



この『キューバ序曲』は、ガーシュインが34歳の時にキューバへ行った際、現地の音楽に影響され書いた曲です。キューバはご存知の通り中南米はカリブ海に浮かぶ最も大きな島国、「刑事コロンボ」などでもおなじみの最高級葉巻の名産地ですので、ガーシュインもきっと堪能したことでしょう。国民は大半

がスペイン系とアフリカ系のミックスであるため、ラテン音楽の中核的な存在といわれ、結婚式やパーティーで踊られるルンバのリズムはその代表的なものです。この曲はラテン打楽器(表紙の写真参照)の活躍で血沸き肉踊るルンバの部分と、それに挟まれたエキゾチズムあふれる旋律が印象的な中間部を持つ3部構成でできています。

なお、題名にある「序曲」とは演奏会用序曲のことで、特定のオペラなどに付属するものではありません。演奏会用序曲は、オペラ序曲などと同様の3部形式を持った独立した管弦楽曲で、オペラ序曲がその存在を保ちつつ、後にハイドンの手により交響曲へと進化したように、演奏会用序曲も同様にリストやサン＝サーンスにより交響詩へと進化していききました。

ハーモニカソロの3曲はジョーからコメントをいただいていますので、それらをご紹介します、プログラム・ノートといたします。

V.モンティ／チャルダッシュ

とてもダイナミックな曲です。すごく情熱的で揺れるテンポのオープニング、突然始まる猛烈に速くて技巧的な主題。聴く人をエキサイトさせる華々しい曲です。

ピアソラ／リベルタンゴ

ピアソラの最も有名な曲で、私のお気に入りの1つです。誰の耳にもすぐ入る繰り返されるメロディックなフレーズと3 + 3 + 2のリズムの「タトタトタト」で、私は立ち上がって踊りたくなくなってしまいます。

G.ジェイコブ／ハーモニカと弦楽オーケストラのための「五つの小品」

クロマチックハーモニカのニュアンスを十分に引き出す五つの小品による音楽旅行は、にぎやかな「カプリース」で始まり、内面をなだめるような「子守歌」、ノリのよい「カントリー・ダンス」、瞑想的な「挽歌」、そして華やかな「ロシアン・ダンス」でフィナーレを向かえます。この曲は超絶技巧性と印象的旋律性の二面を持つ、ハーモニカとオーケストラのための数少ない作品だと私は思います。

A.ドヴォルザーク／交響曲第8番 ト長調 作品88

「それは君、3連符と言うのだよ」

白髪の紳士は学生服の私にそうやさしく教えてくれました。自分が始めて買ったクラシック音楽のレコードだったこの曲の冒頭でチェロに出てくる「タララ・ラー」の部分がなんともいえず素敵だと言ったことでした。そのときから私はこの曲の3連符探しを始めました。当時の私にはオーケストラ・スコアを読む知識など全くなく、それはただレコードプレーヤーの前で聞き耳をたてる方法でした。



第1楽章の「タララ・ラー」は私にとって、クラスで気になる女の子のショートヘアーに添えられた髪留めのような存在、ワンポイントの輝きでしたが、第2楽章はその始まりから「タララ・ラー」が満載でした。そしてその数限りなく続く「タララ・ラー」は一つひとつ色や景色が違い、またそれぞれ言っていることが違って聞こえてきました。高貴でやさしい聖母の言葉、すこしかげりのある表情、深い悲しみの嘆き、そしてその気持ちを噛みしめるようにつぶやく。3連符すら知らない私が、トニックサブドミナントドミナントといった和声進行など知る由もなく、私はこれらの3連符から、ドヴォルザークが何を言おうとしているのかを感じ取るイメージの世界に時を忘れたものでした。



第2楽章で3連符を聞きすぎた私は、本来の均等に3つの音が入る3連符を拡大解釈するようになり、3つ続いた音のかたまりを3連符と思うようになっていました。そういう意味で第3楽章は3連符の天の川。曲の出だしだけでも、ヴァイオリンのメロディの凜とした立ち上がり、続く優雅な下降、同時にクラリネットとフルートがきらきら。第2楽章が色や言葉なら、この第3楽章は体の動き。それはまるでバレリーナを見ているようでした。



3連符の拡大解釈は第4楽章にはいるとさらに激しくなってしまうようで、トランペットのファンファーレに続くチェロの旋律はほとんどが3連符に聞こえていました。第2楽章と同じような繰り返しが、今度はなにか暖かいものの中に感じました。クライマックスでは、トランペットやホルンが湧き出る3連符を力強く鳴らします。



「全てを知る必要はない。正解かどうかなんて全く関係ない。自分の波長に合って、自分が興味をもてる部分を1つでも見つけることができれば、きみはその音楽を理解したことになるんだ。」
紳士はそう言って、やさしく微笑んでくれました。